

今年も暑い夏になりました。気温が三〇度を超すと真夏日、三五度を超すと猛暑日といわれ、毎日のように熱中症で倒れる人や亡くなる方まで出ています。人のご挨拶も『毎日暑くて大変ですね』を連発しています。汗をいっぱいかき、喉も乾きます。冷たい水をコップに注ぎコクコクと喉を鳴らしながら飲むときのおいしさ！たらありませんね。でも私にはいつも「あの時の暑さは？」「あの日の渴きは？」という声が聞こえてくるのです。この事が今日のテーマで、私は苛烈な戦争のさ中に出会ったお二人について語りたいと思います。

初めに、私の自己紹介を兼ねて簡単に時代を振り返ってみます。私は、大正一五年、昭和元年と重なりますが大正最後の年に生まれました。日本の敗戦・終戦までの二〇年間を、たつぷり軍国主義の中で育てられました。日本の滅びへの道を、私も多くの人々と共に歩いていたのです。

この間の歴史を繙きますと小学校に入学した年に満州事変が起こり、上海事変・国際連盟脱退・二二六事件等々と続き、そして昭和一二年小学校五年生の年、日中戦争が勃発いたしました。

そして、この翌年私は広島女学院高等女学校に入学いたしました。女学院だけを志望する生徒は無試験入学でした。古き良き時代でした。当時の院長先生は、日野原善輔先生、今聖路加病院の院長としてご活躍の日野原重明先生のお父様です。信仰厚くまた自由主義者として徹底していらした先生から溢れる雰囲気は、ミッシヨンスクール広島女学院の校風そのものであり、明るく自由、しかも節度ある学校生活を、私たちは存分に送ることが出来「わが女学院生活に悔いなし」といつも思っていました。それは、偏に生徒一人一人を大事にという愛の教育が女学院の建学の精神であったからだと思います。でも軍都広島のみッシヨンスクールとして軍部が見逃すわけ

はありません。私たちの知らないところで既に広島女学院の茨の道は始まっていたのでした。

学校は、時局に合わせ、教師も生徒も農村の手伝いや勤労奉仕に一生懸命つとめました。戦意高揚の為の市中行進にも、他の学校と共に、隊列を組んで軍隊式に勇ましく行進するのですが、ただなぜか、女学院はいつも一番最後を歩かされたものでした。

特にアメリカからいらしていた八人の先生がたには軍の監視が厳しくなり、時局が愈々緊迫する中で遂に昭和16年が4年生になった六月、多くの思いを残してアメリカに引き上げて行かれることになったのです。

日野原院長は、注意人物の一人として度々憲兵隊に召喚されたり、常に尾行されたり、キリスト教教育に対する弾圧や干渉を受けながら、信念と勇氣をもって多くの労苦に堪えていらっしやいましたが、定年を迎え、新しく松本卓夫院長を迎えました。

一九四一年一二月、太平洋戦争が始まりました。既に一九三九年「国家総動員法」が制定されていましたが、戦争が長期化するとともに、国内の総力戦体制は益々強化され、言論統制、治安維持法など国家の干渉・弾圧が強まりました。

女学院は愈々受難の時を迎えることになったのです。「女学院はスパイ学校」という風評が市民全体に拡がり「広島女学院廃止すべし」とビラやポスターが貼られ、演説会まで開かれるようになりました。私達にも、電車に乗れば校章を見て「スパイ学校の生徒か、止めてしまえ」と言われたり、通学の途中「スパイ、スパイ」と子供達からも、石や砂を投げられたりもしました。また登校中、電信柱に貼られた「倒せ、広島女学院」のビラを剥がして学校に持ち寄っては、どんなに悔しい思いをしたことでしょうか。ついに学校は警察に保護顧を出して生徒を守らなければなりません。このような状況の中で昭和一八年女学院を卒業しましたが、その後の戦争終結までの二年間が女学院にとって最も悲惨な時を迎えることになりました。

軍当局の嫌がらせが更に露骨になってきました。県学務・特高警察・憲兵が視察という名目で何回も学校に出入りするようになり、果ては礼拝や聖書の授業まで干渉するようになりました。また校舎の中を具に点検し、イギリスの国旗を探し出して、獲物得たりとばかり罵声を浴びせ、没収して引き上げるというようなこともありました。

また最も残念な出来事は、女学院にも皇国主義の先生がいて、憲兵隊へ内通していたのです。職員会議の内容・重要書類のあり場所・院長・教師の発言・行動などが、その日のうちに憲兵隊に内通されるようになったのです。謂わばユダの内通です。

私が最も胸の痛む悲しい出来事が起こりました。敬愛してやまない光井文武とおっしゃる教頭先生の事です。「倍仰の人」という言葉がそのままの先生で、分厚い近眼のメガネの奥にいつも優しい目が光っていました。教科は数学担当、テストを返して戴く時は「Aさん七〇点」「Bさん九〇点」「みつちやん五〇点、帰ってお父さんに聞きなさい」（みつちやんというのは先生のお嬢さんです）というように、生徒の方も現在の様な変な競争意識もなく、みんなにやにやにこ

にこしながら和氣藹藹の雰囲気の中で、勉強もしっかり致しました。祈禱会にもいつもいらして下さり、生徒が祈る時には、言葉と勇気を引き出しそれが神に届くようにという熱い思いで『アーメン・アーメン』とおなかの底から出るような声で一緒に祈りに加わって下さっていたことなど思い出します。この先生が一番憲兵から要注意人物として狙われることになり、憲兵隊に召喚され七日間に亘って朝から夕刻までまるで罪人同様なあつかいで訊問が続けられたのです。出頭された時にはすでに数十枚という調書が用意されていました。それまでに卒業生や在校生五〇人ほどが、憲兵隊に呼ばれ、誘導尋問による証書を強要されたものでした。憲兵はその調書を、先生に見るように言いましたが、先生は一ページも開くことがなかったそうです。もし開いて生徒がどんな証言をしているかが分かったら、聖人ならぬ身だから、万が一にもその生徒を憎む思いが残れば、

愛してきた生徒を失うことになると思われたからでした。キリスト教弾圧の矢面に立ち遂に教職を追われ、非国民のレッテルを張られ屈辱のうちに愛する女学院を去って行かれたのです。私が卒業する時に「わが魂は、渴けるごとく活ける神をぞ慕う」と書いてくださったその御言葉の中に、先生の苦悩を思い信仰を思い涙が滲みます。

その後先生は北海道に渡り農業を始められ、仕事の合間に「ケリテ川辺・わが漂流記」と題する記録を残し、それまでの心労と病軀が重なって、学校を去られ5年後にお亡くなりになりました。先生の死後手記は、ガリ版刷りの文集にしてご長男が私の所にも送って下さいました。憲兵隊による取り調べのありのままが書き残してありました。光井先生は倍ずる道を、一筋に歩まれたのでした。

一方、内通していた先生も、その後応召され戦死されたということを知りました。

広島に原子爆弾が落ちたのは、昭和二〇年八月六日、丁度六六年前の昨日でした。原子爆弾は、広島市の上空五八〇メートルの高さで炸裂し、爆発から一秒後、直径一五〇メートルの巨大な火の玉の温度は太陽の二つ分、一二〇〇〇度に達し、爆心地から半径約五〇〇メートル以内の人々や住宅は三〇〇〇度から四〇〇〇度の高熱で焼き尽くされました。

今は、暑い、暑いと言いますが、気温はいくら高くても四〇度までですよね。でもその暑さで熱中症で倒れたり悪くすると、亡くなっ
ていく人がたくさんいます。これが人間の生き得る限界なのです。水は、およそ生物体の七・八〇%を占め、生きて行く上で欠くことのできないものです。だから原爆直後の「あの渴き」はどんなに激しいものだったでしょうか。四〇〇〇度に近い熱風によって人間も空気もカラカラに乾いて木の葉のように焼かれて行ったのです。

私は、当時広島女子専門学校の三年生、一年前から動員学徒として宇品にあった「陸軍船舶司令部・暁二九四〇部隊」に配属され賠償課という部署で働いておりました。国家が、一般の船会社から商

船を徴用し、外地へ兵士や軍馬・武器などを送る御用船として借り受けていました。私の仕事は、その船が爆撃や雷撃を受けて沈没すると、海難報告が入ります。私たちは、それを読んで損失を受けた船会社に軍が賠償をするための書類を作る、その下書きの仕事です。今から考えると、いきなりこんな大それたお仕事が出来たものだと思います。後に司令部の一部が井の口の高台に疎開し、私たちもそちらに移されました。

八月六日の朝、何時ものように電車に乗って、井の口の兵舎に着き、朝礼のため整列をして、軍人・軍属の人達と上官の訓示を聞き終わった時です。一瞬白い大きな閃光がバツと走り、兵舎を通り抜けました。追っかけて轟音が兵舎を揺らし、ものすごい響きに、至近弾が落ちたのかと思い、全員急いで防空壕に駆け込みました。広島が死の町と化したその時でした。

幸い三、四〇分の差で直接被爆は免れましたが、二日後から軍の命令で動員学徒の一部は救護所で怪我人の看護、私達は搜索隊として2・3人ずつグループを組んで、当日家屋疎開のため休暇をとつていたクラスメートを探しに、井の口から船で宇品に上がり凱旋館という軍の大きな建物に足を一步踏み入れた途端、息を飲みました。広い床はびっしり死体で埋められていたのです。それから国鉄の宇品線に沿って歩き市中に入りました。

見渡す限り焦土と瓦礫の町、生臭い死臭に満ちた町、頭や足に血の付いた包帯をして黙々と歩いている人間、死体もまだあちこちに放置されていました。

その無残な姿はとても語る気持ちにはなれませんが、一つだけ死者の許しを得て語れることがあります。それは集められた兵隊さんの遺体、ぼろぼろになったゲートルの聞から、お腕を伏せたほどの大きな水膨れが覗いていたことです。このようなその死の町に元気で生きて居る物がいました。それは、真っ黒な蠅の群れです。屍から生まれ出た何千匹ともいえぬ蠅が道行く人の背中が真っ黒になる位びっしりとへばりついて、一緒に歩いて行くのです。蠅は飛ぶことをしない。ただ血の付いたボロボロになった服にへばりついて

のです。その日は、風もなく晴れ渡った日でしたのに、全く汗がないことに気が付きました。これも異様で不気味なことでした。傷一つない私が歩いているのも不恩義でした。

茫然として歩いている中に、広島駅の裏の東練兵場まできました。そこは死体焼き場になっていて、既に茶毘に付された人の名前や特徴を書いた紙が傍の木に吊るしてありました。近くに東照宮という大きな神社の境内が救護所になっており、顔もよくわからないたくさんの怪我人が収容されていました。「中沢靖子さーん」「判田方里枝さーん」と叫びながら怪我人の間を縫って歩いていても虚しいばかりでした。ふと『姉ちゃん、お水チョウダイ』というかぼそい声が足元でします。見ると、五・六歳位の小さな女の子が、顔も背中も焼け爛れて横にもなれないのでしよう、蹲ったまま、細い腕を私の方に向けて、どこで拾ったか小さな瓦けを持って見上げているのです。私は、私は一言の声さえ掛けないで通り過ぎたのです。何の感情もありませんでした。

後になって、私は慄然としました。あの時の私は一体なんだったのだろう。私は一九歳、一番多感な少女の筈でした。しかも、呼び止められたのは、他の誰でもないこの私だったのです。どうしてどうしてと自分を責めても取り戻しようもありません。あの非常な世界で、私の人間的な感情は凍結してしまっていたのでしょうか。八歳の今日まであの『姉ちゃん』という消え入りそうな声が、わたしの耳元から消え去ることは有りません。

そして、この本当に通り過ぎただけの僅かな時間が、私にとっては原爆の総てを凝縮したものとなり、更には「戦争と人間」という重い大きなテーマと向き合わないでは居れないことになりました。

私は、ごく平凡な一市民です。普通の人間です。この普通の人間が、戦争という大渦の中に巻き込まれ、人間の命を消耗品のように見做された時代に、私は人間らしい感覚を失って、化石のようになっていたと思えないのです。あの多くの死体や怪我人が横たわっている片隅で『ネエチヤン、お水チョウダイ』とお水なんか入り

そうもない小さな茶色の瓦けを差し出し、命の水を求めた少女を、私はなんの反応も見せず、無視して立ち去ってしまったこの心の痣は、私が死ぬまで消えることは、決してありません。

私は、夏の渇きを覚えるたびに、少女の切羽詰まった渇きを思い、自分の非情を悔い、取り返しのない六六年の歳月に苛立ち、戦争が私の人間らしさを奪い去った事を痛切に反省するのです。

今日の演題に掲げました「その渇き」とは、「わが魂は乾けるごとく活ける神をぞ慕う」と書かれた光井先生と、この少女と私の心の渇きの事です。戦争とは、そんな人間の心を紙切れのごとく無感情に、無感覚に無感動に奪い去るものであることを、私は皆さんと共に、思いを新たにしたいと考えました。

※当日のご講演の内、御証言を中心に編集させて頂きました。尚、全講演はDVD化して教会図書に収めました。貸出いたします。